

児玉日容上人

— 本多日生師への伝灯 —



こだまにちようしょうにん
児玉日谷上人御尊影



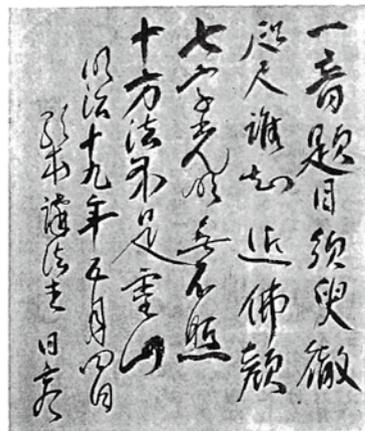
兄玉日容上人直筆大曼荼羅
(井上家所蔵)



兄玉日容上人直筆大曼荼羅
(武田家所蔵)



大田原誠一郎氏への葉書



兄玉日容上人直筆『統一』から引用



兄玉日容上人墓碑



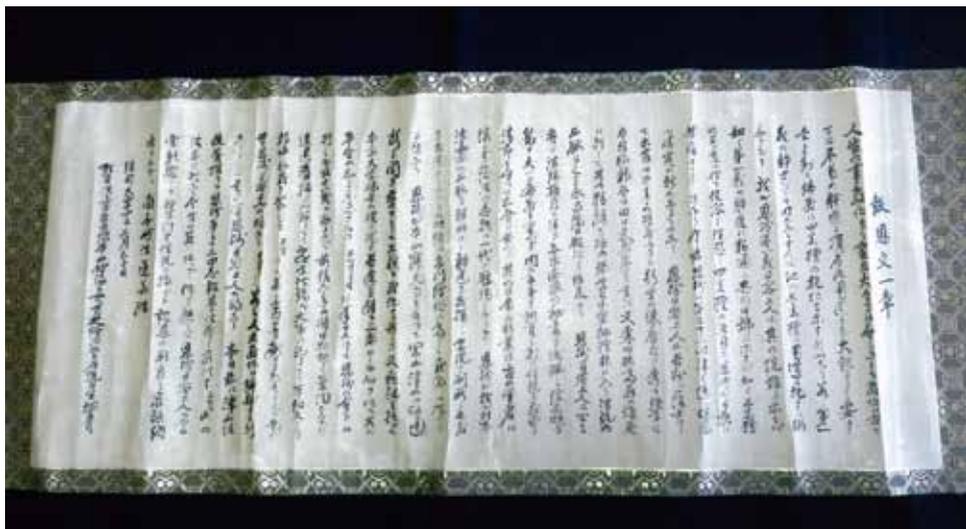
児玉日容上人直筆文

報恩文一章

ほんだつしょう
本多日生

「人生の事教化より重且大なるは無し 而して教化に方りては不易の躰道と順応能用道とを大観するを要す 是れ乃ち仏教に四悉檀の施化を示す所以なり若し第一義の躰道にして明かならざらんば他の三悉檀の用道は施すに術無きなり 我が恩師第一義日容上人は其の院號の示すが如く第一義の躰道に精通し其の日號の示すが如く三悉檀の用道に於いて従容を理想し四悉檀の活用は恩師が日夜に苦慮せられし所なり 今茲恩師の第三十三回諱を迎へ追慕の情寔に新たなるものあり

恩師日容上人は長州の藩士にて出家は中年の得度なるも行学の鍊磨衆に秀て経学は本所臥龍塾の田口文藏先生に学び又森田拙齋翁の講筵に列して其の精髓を極め 佛学は小栗栖檀林に入り法統の正脈は之を永昌院日鑑師より継承せり 恩師日容上人は心を専ら法統擁護に注ぎ各宗各派の秘書を涉獵し信念頗る篤く大いに布教を重んじ内に子弟を訓育し外に信徒を教化す 清節を守つて赤貧に安んじ其の日常の行業は古の聖者に譲らず護法の志願は一代に冠絶したりき 恩師が我が頭本法華宗の正脈を鮮明にし躰道を發揮し学風を刷新し布教を發達せしめたるの功績は宗門僧



本多日生上人直筆「報恩文一章」
大正 11 年 3 月 30 日奉告



日容上人墓所。兄玉日容上人第 33 回忌墓前法要
中央やや左奥に日容上人墓碑、中央は本多日生上人
大正 11 年 3 月 30 日撮影

俗の等しく感激して措かざる所なり 恩師が本山寂光寺を去つて岡山津山に弘通所を開き孳々と
して正義の教化を布き又病軀を提げて本宗大学林長の職に就き長途を経て上京せしが如き以て其
の平生の志を見るべきなり 又不肖日生は年十三にして恩師の會下に列し以後十八歳に至るまで
前後六年の間日夜親しく薫陶を受け進退清掃の小節より教学法統の大事に至るまで事細大となく
指導啓発を蒙り 不肖にして若し宗門に貢献する所ありとせば是れ皆恩師日容上人の賜なり
不肖にして若し人文教化に裨益する所ありとせば是れ皆恩師日容上人の賜なり 本日茲に津山信
徒胥謀りて恩師第三十三回忌報恩の法會を厳修す 不肖此の法筵に列なり今昔の感に堪えず仰ぎ
願わくば恩師日容上人の尊靈影響して我等門弟信徒の捧ぐる報恩の微衷を哀愍納受したまへ 南
無妙法蓮華經」

維時大正十一年三月三十日

顕本法華宗管長総本山妙満寺貫首大僧正聖応院日生稽首

※この「報恩文一章」は、兄玉日容上人第三十三回忌法要を大正十一年に津山顕本講布教所
(津山弘通所) で勤修した時に弟子本多日生上人が奉告されたものである。平成七年に顕本
講建物を取り壊した時に発見された。